
絶対神の暇つぶしに付き合わされる少年

ラグエス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対神の暇つぶしに付き合わされる少年

【Nコード】

N8784I

【作者名】

ラゲエス

【あらすじ】

いつの間にか漫画等の世界に連れてこられる主人公が絶対神ヴィシユヌの暇つぶしにより最初の世界へ向かう事になった。その少年の運命はどうなる！？チート・最強・オリジナル主人公・オリジナル解釈・他世界の技などが出てきますのでご注意ください。このSは不定期更新です。

プロローグ『勝手な始まり』（前書き）

チート・最強・オリジナル主人公・オリジナル解釈・他世界の技などが出てきますのでご注意ください。

プロローグ『勝手な始まり』

プロローグ『勝手な始まり』

一人の少年がいた。

見た目は学生の少年が周りを見て呟く。

「ここはどこだ？ 何でアニメの世界にいるんだ？」

なぜか二次元の世界に入ってしまった少年が目の中の光景を見て呟いた言葉だ。全身を見るとアニメになっている。

3次元に見えなくなっていた。意味分かんないよ。

それに何があったのか良く分からない。

俺は昨日の状況を思い出そうにも、プロテクトがかかっていて思い出せない。

「名前とか全ては言えるんだよね」

白坂斗真^{しんざかとうま}、16歳ぐらいで学生。

身長もその辺の同学年の学生と同じで、体重は58キロ。趣味はアニメ、漫画、ゲーム、体を鍛えるなら何でもだ。

好きなタイプとかはどうでもいいな。

「覚えてるがどうなってやがる！」

その時、周りが一気に白くなった。
何処までも続くように全てが白い。

「我は全ての始まりを知る者」

そんな声が響いた。

「誰だ！」

「我は絶対神ヴィシユヌだ」

「……その神が一体何の用ですか？」

この威圧感、ヤバい！ やばすぎる！
俺死ぬぞ！

パニックになっている俺を神とやらはこう言ってきた。

「白坂斗真に別の世界へ行ってもらう。もちろん、我の暇つぶしだ」

暇つぶしってどこまでお暇なんですか！？

「我は孤独の身であり、次元世界や全ての宇宙を管理している者とは違う」

「じゃあ、どういう神なんです？」

「我より絶対的な力を持つ創造神がいる。そやつの干渉している世界に行つて欲しい」

「創造神？ 名前は何と言っんですか？」

ようやく姿を現したと思ったら、白い龍だった。
絶対神って龍だったのかとびつくりしたが、

「私の姿は自由自在だ。我にとって姿など無意味よ」

「それよりも、名前を」

「それは我にも分らぬ。とにかく向かってほしい」

「このまま行ったら俺、死ぬの確定なんじゃあ」

自分にはそんな力はないし、どうしようもない。

目の前の龍の声が響く。

「能力は我が用意しよう……白坂斗真の好きな能力をくれてやるから逝って来い」

「逝くって俺が死ぬんですか!？」

「心配するな、白坂斗真の聞き違いだ」

「それで何処の世界なんですか？」

肝心の世界が分からないと参考にもならない。
危険な世界は絶対に行きたくない。

そう願っていると目の前の龍が答えてくれた。

「学園都市」

「とある魔術の禁書目録……」

「正解だ。とある世界に今から送る。そこで目的を果たしたら別の世界にも逝く事になる」

「逝くって聞き間違いなのか？」

「気にするな。私の言葉は元からだ」

元からって気にするに決まってる！

絶対神って強いのか？ 龍だからってなあ……

「能力は向こうで分かる。とある世界へ行け！！」

龍の眼が赤く光ると、白い空間からフィルムのように景色が変わる。
俺の視界がおかしくなり、頭が真っ白になると意識を失った。

く?????・公園く

意識が覚醒した俺は目が覚めると公園にいた。

「ここはどこだ？ 何か体がすごく軽いな」

準備体操を一式やった後、どこかへ行こうとポケットの中に手を入れる。

「ん？」

違和感が感じた俺は違和感のある物を取り出すと丸まった紙があった。

丸まっている紙を広げる。

俺は怪しそくに紙の中に書かれている内容を見て驚き、つい声を上げた。

「はああああああ！？ 何だこれ、バランスブレイカーどころかチートを超えてるぞ！」

チートを超えてると言ってしまった。

翌々と考えてればチート以上の言い方であるのか？

そんな事はどうでもいいやと気付いて紙の中身を読む。

そこにはこう書かれていた。

「あの白龍にとっては丁寧すぎるな。えとえと……

超能力世界にはレベル5という存在がいるが、

これは別世界移動も含むため、全てを含み記載します。

体はビッグバンでも死ぬ事がない。精神攻撃も通用しない。

攻撃系は魔法、魔導、魔術、法術系を中心とした知っている魔法を再現可能。

知っている全ての技が利用可能の方が正しいか、だったらそう書けよ！

自分で作り出すことも可能だが、低レベルしかできない。

体力と別魔法の元となる精神力などは自然回復やMP回復系のみで可能。

また、ロボット系も出せるかも知れない。出したらヤバイじゃん！

それを利用して悪用した場合は始まりからやり直しになる。

超能力の世界だからある程度荒らしても良い。

最後に、白坂斗真であるお主にマスターフラグを授けた。

それを利用して、全てを利用し、ハーレムを築くのだ！」

それを読み終わった斗真はその紙を破り捨てて公園のごみ箱に捨てた。

「マスターフラグって何？ 悪用して世界を征服とかしたら初めに戻るか」

学園都市なんだろうけど、部屋でも探しに行くか。
めんどくさそうな事を任された俺は部屋を探しにどこかへ向かうとした。

「おい！」

声を掛けられた俺は呼ばれた方向を見る。
変な筋肉質の男たちだった。
そのリーダー的な男が俺にこう言った。

「金寄せ！」

「はぁ……いきなりチンピラか」

この世界に来て、最初に会ったのが筋肉男の上、チンピラだったら嫌になる。

むかついた気分になった俺に男が拳で殴ってくる。

「うらあああああ！！」

「うざい！」

俺は魔力を周辺に放出。

放出された魔力により、男たちが吹き飛んだ。

吹き飛んだ男たちは公園を超えてどこかに飛ばされていた。

「……ふう、疲れたから街に行って部屋探しにいく」

俺は吹き飛んだやられ役を記憶から葬る。

葬った後、無かった事にして街の方へ目指した。

第1話へ

プロローグ『勝手な始まり』（後書き）

次の話は原作キャラ登場。

ヒロインはフラグが数人しかいないと思います。
ほとんどが原作主人公なので。

第1話テスト『接触』（前書き）

とりあえず、第1話お試し公開。

第1話テスト『接触』

俺は公園から出て、ようやく街に着いた。

時間がかかる理由？ 絶対神の言う事なんか信頼できるか！

能力を何でも使っていいって言われてはいそうですって答えられる奴がいる？

世界に悪影響をやった瞬間、初めまで巻き戻される。

そんな罰則が存在するのに、素直に何でも使えってありえん。

制度？の事を文句言いながら周りを眺める。

やはり、学園都市そのものだ。

超能力の気配が感じまくる。

能力者がいっぱいいるし、防衛ロボットらしきものもある。

正式名称忘れたけど重要な事じゃないからいつか。

「でも、問題は能力だな」

ヤラレ役に魔力を開放程度しかしていない。

残りの能力を考えなければいけない。

と、その時、悲鳴が聞こえた。

少女の悲鳴だ。

悲鳴した方に走っていった。

2人の少女が一人の男と対峙していた。
男はニヤツとイヤラシそうな表情で少女を見る。

「白井さん、あの人は私たちに攻撃しそうですよ？」
「ふう……あなた達、私達がジャツジメントと知っての行動でして？」

慣れている様子の白井と呼ばれる少女が鋭い視線を男に向ける。

「知ってるさ、だから俺達の力でお前達をぶちのめすんだ」

拳を握って2人の女の子にビビらせる。

だが、それに慣れている2人の少女が普通に話す。

「力？」

「このレベル5の能力を見せてやる！！」

「レベル5！？」

「食らえ！ 炎に包みこまれて空間ごと飲み込まれる！」

「空間ごと！？ まさか……」

「レポートも出来ねえぞ！ よってお前たちはここで寝てろ！」

「お前が寝てろ！」

その声に3人がみる。

男の炎が声がした男の方へ方向転換した。

だが、声主である男はニヤツと口を歪ます。

「はっ！」

声主である男、つまり俺は気合いを放った。

気合いの力で炎が消えた。

「何だと!？」

「女の子をいじめる様な糞野郎はこの場で寝てろ!」

全身からスパークが走る。

スパークが段々激しくなっていき充電完了。

「食らえ!」

その男に俺は容赦なく雷をぶつけた。

「ぐああああああ!?!?!」

悲鳴を上げた後、男が気絶した。

俺は2人の女の子を見て固まった。

「はい? 白井黒子に初春飾利……」

「どうして私の名前を? それに初春の名前も」

「どこかでお会いしましたか?」

2人は会った事があるのか?と首を傾げて思い出そうとする。
会ってもいないってそれ以上悩む必要はない。

「名前を知ってるだけだよ。じゃあ」

「ちよつとお待ちなさい!」

いきなり引きとめられた。

「はい?」

「あなたはレベル5なんですか？」
「知らん」

知ってる訳もない。

先ほどの雷なんて適当に思い浮かんだだけだ。
それに気合いはゴクウの応用だし。

「知らんって」

「ここに来るのは今日が初めてだから全然」

「そうなんですの」

「データにはあると思いますので確認だけさせてください」

やばい、そんなもんこの世界のなんてない。

あの絶対神め、どうすりゃあいいんだ？

逃げるか……？

「じゃあ、俺はこれから行かなきゃいけない所があるから」

とにかく、用事があるという意思を。

必至とまでは言わないがそれを伝える。

「直ぐに済みますよ？」

「それぐらいの時間ありませんの？」

「まあ、助けてくださいましたし」

何か俯いてゴニヤつと聞こえた。

感謝してくれてるのは嬉しいけど、これはまずいな。
よし、今ならいけるな。

「……今しかない！　じゃあな」

「ちょっと!？」

「ちょ……!？」

2人の声がしたが、気にせずここから転移した。

出来る限り、別の方まで来た俺は今後の事を考える。

「どうするか、野宿なんて御免だぞ……ん？」

何か人がいた。

誰だ?とみると、上条当麻とインデックスがいた。
生で当麻を見れるのはある意味いい事だ。
でも、不幸は移りたくないが。

「とうま」

「何だよ、インデックス」

「お腹空いた」

「家に着くまで待ってろ」

「う〜〜〜」

インデックスで食事の事でむくれていた。

どの辺のストーリーなんだ?

それぐらいはってわかるか……

気配を感じるし。

「まあ、あの2人との接触はまた今度かな」

見つからないようにこの場から動いた。

その時、空間が白くなった。
全ての色が白くなってしまっている。
これってあの時の……

「何だ？」

「言い忘れていた」

神の声だけが響く。
忘れるなよ……。

「え？」

「お前の住む場所は当麻の隣だ。斗真」

「マジなの？」

「マジだ」

「そうですか……」

「これだけだ。さらばだ」

白い空間が全て元通りになった。

「見つからないように行かないと駄目か」

当麻の住んでいるマンションを想像して隣に座標を合わせ転移した。

く斗真の部屋く

普通に着る服とか全部整理済みだった。

最初っからここに設定されているような気がする。

「考えててもしよーがないか」

とりあえず、今後は明日考えるところ。

俺はベットにダイブしたまま眠った。

n e x t 第2話へ

第1話テスト『接触』（後書き）

これが正式となるかどうかは未定。
変更になる恐れもあります。設定『だけ』は変わりません。

第2話テスト『接触』（前書き）

サブタイトルに意味はありません。

こちらは更新ゆっくりペースで進行します。

第2話テスト『接触』

当麻の隣の別室で寝ていた俺は起きる。

「ああ。そういえば、俺って学校とか行く必要があるのか？」

小さいテーブルがいつの間にか設置されていた。
その上に紙が書いてあった。

何だろうと思い、その紙を読む事にする。

「何々……学校は行く必要がない。なぜ？」

お前に学歴なんて必要がない！つまり、馬鹿のままで過ごすが良い
！！

と思った事は一度もないぞ……ほう、本音見えまくりじゃん」

まあ、高校なんて一度も行かなくてもいいしな。

この世界の後の世界ってどこなのかにもよるが。

今の俺に戦い以外を鍛える必要がない。

つーことは俺って何もしないでいいって事？

「2枚目があるな。……この世界はベクトルを操る者を当麻と一緒に倒せばいい」

これだけしか書かれていない。

倒せばいいって無茶苦茶だろうが！

結局、当麻に接触しなきゃいけないのか？

あの赤いロン毛もか……。

準備をつて準備をする必要がないから、このまま出て行った。

自分の部屋から出た瞬間、白い服を着た少女がいた。
服？ 言い方なんてどうでもいいか。

とりあえず、インデックスだ。

あゝあ、こつちを睨んでるし

「んゝ、誰？」

「白坂斗真だけど」

「とうま？ 私はインデックスって言うの」

笑顔で名前を聞いてしまった。

普通に怪しいと思わないのですか？

「俺はこれから用事があるから失礼する」

「うん、またね！」

手をブンブンと振っていた。

俺はインデックスに背を向けて歩き出した。

人が多い町に来た。

あの2人には会えませんでした。

祈りながら歩いて行くとクレープ屋があった。

ちょうどいい。と財布からお金を出そうとするが

「この世界のお金ねえや……どうすっかな」

財布の中身がからっぽだった。

この世界に来た時、財布がポケットの中に入っていた。

今更気づくなんて俺も忘れがちな？

呑気にクレープ屋を通り過ぎると前方から「あ！」と声がした。

「え？」

「あなたは……」

「ん？ 黒子、知り合い？」

前にいたのは御坂美琴と白井黒子だった。
レベル5のレールガンと呼ばれる少女。

「ええ、レベル5の族から助けていただきましたの」

「へえ、あんた、レベル5なの？」

「いや、違うけど」

「嘘！？ あんなに楽勝に勝ってましたのに？」

「ほれ」

身分証明書を見せた。

ちなみにこの身分証明書は神が構成したものらしい。
ばれる事もないみたいだ。

「白坂斗真…… 16歳、学生免除、能力レベル0！？ ホントだ」

「ニセモノではありませんのね」

「そう言う事だ」

証明書をしまう。

「俺はこれで失礼させてもらうぞ。今からぎ……！？」

爆発する音がした。

何だよ、次から次へと原作にない出来事ばっか起こりやがって！

斗真専用イベントとかほざく気か？
青ざめながらも現場まで走っていく。
後ろから声が聞こえるが気にしない。

「現場」

ぼろい建物の中に入った俺は気配を感じ取る。
気配の位置を読みとった。

「女の子はゼロ、男が5人か……」

建物は3階建てのため、階段から上がるうとしたが
何時来たんだ？と思う黒子がいた。隣には美琴もいた。

「ちょっとお待ちになって」

「何で……」

「能力者ゼロの人がこんな騒動に巻き込まれてはいけません」
「美琴だっけ？ そっちのオチビをお願い」

「オチビってこう見えてもアダルトな下着を履いてますのよー!!」
「じゃあな」

俺は屋上まで駆け登る。

「付いたか」

「ククク……ん？」

「お前は誰だ!？」

ヘツドの男が怪しく笑っていた。

「俺か？ 俺は白坂斗真、能力レベル0」

「レベル0だと!？」

「始めようか、正義の味方の仕事を」

魔力を放出。

もちろん、相手が魔力なんて感じ取れるはずがない。

「いくぞ!」

ネギまの世界の魔法を使ってみますか！

「千の雷」

上空から魔法陣が展開。

相手は上の不思議さに戸惑うが俺は容赦なく撃つ。

「発射」

千の雷もどきが相手に直撃し、感電した影響により灰になった。
相手の声？ そんなもん、ある訳がない。

「ん？ 千の雷ってこんなんだっけ？」

そういえば、別世界の魔法を思い浮かべてしまったのか。
それだけで影響があるのか。

溜息を漏らすと、残りの4人を探すため行こうとしたが、

コインが上乗せになったレールガンが横を通り過ぎた。
マッハ3つーことは美琴か。

「何だ!？」

「あんた、やっぱりレベル0に見えないわ。何よ、あの電気は」

電気違う!

あなたのレールガンと一緒にするな!

こっちはただの魔法だぞ!とは言い出せなかったため、

「あれは、電気もどきです」

「嘘つけ!」

当麻に攻撃するみたいな出力で攻撃してきた。
俺は向かってくる電撃を分解し、消滅させた。

「何すんだ! こうなったら……グレイボム!」

俺と美琴の間に向けて爆発させた。

「ちょっと!？」

混乱している御琴を見てこちらの動きを把握できないと思い逃亡した。

逃亡ルートはもちろん、空を飛んでた。

地上だと色々と面倒だからだ。と思つたら上を向こうとしてる人がいる。

ヤバい。これはヤバいため、転移座標位置を自分の家に設置後、転移した。

家に戻ってきた俺は机の中を探る。

探つて見ると聖書みたいな本があつた。

本の上に紙がある。その紙に注意書きという項目があつた。

「え？ この本は闇の書というリリカルなのは物だ。

この中にお前の使用した呪文が記憶される。

これが全部埋まるという事があるぞ！頑張つて埋めるのだ」

「ちよつと待て！ 闇の書のページつて666ページだろ？無理じゃん」

1ページめを見ると千の雷だけで50ページ埋まっていた。威力の高い呪文とかだとページが大幅に蒐集を行うようだ。

「でも、何に使うんだ？ 別に騎士とか来る訳でもないし」

ま、考えても仕方がない。

「とにかく、金がないから違う方面の道で銀行行くぞ！」

とにかく、通帳を作ってからじゃないと何もできない。

もう一度、玄関から外へ飛び出した。

だが、白坂斗真は見過ごしていた。

一枚の紙に右下の小さな文字に『埋まったら今回だけ時間が巻き戻る』という悪戯満載の文字があると言っ事に。

n e x t 第3話へ

第2話テスト『接触』（後書き）

逆行ネギ優先のため、こちらの更新が遅いですが更新はしていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8784i/>

絶対神の暇つぶしに付き合わされる少年

2010年10月9日02時42分発行